幼年教育研究年報，第26巻
The Annual Research on Early Childhood, 2004, **26**,

研究論文

幼児期教育カリキュラムにおける行事の位置づけと今後の課題

湯澤美紀[1]・山崎晃[2]・芝崎良典[2]・寺上並歩[3]

How do teachers plan school events for the kindergarten curriculum? Problems of school events in the early childhood education

Miki Yuzawa[1], Akira Yamazaki[2], Yoshinori Shibasaki[2] and Namiho Teragami[3]

School events have been considered to play important roles in early childhood curriculum of Japanese kindergartens and day nurseries. Purposes of this study were to investigate how teachers plan school events and to clarify problems of school events in the present early childhood education. First, three teachers were interviewed about school events of their kindergartens. All the teachers considered school events to have much significance for early childhood education and children. However, there was a difference in roles of school events in the curriculum of their kindergartens. Second, two hundred twenty-one teachers answered a questionnaire consisting of several questions about school events at kindergarten. It was indicated that different school events were regarded as important among national kindergartens, public kindergartens, and private kindergartens, and that there was a difference in opinions as to the numbers of school events among teachers. We suggested several problems of school events in the present early childhood education.

Key Words: School event, young children, early childhood curriculum, questionnaire, interview

はじめに

昭和22年に学校法が制定され，幼稚園が学校体系の中に位置づけられた翌年に文部省より刊行された「保育要領」[1)]において，「行事」は保育内容（見学，リズム，休息，自由遊び，音楽，お話，絵画，制作，自然観察，ごっこ遊び，劇遊び，人形芝居，健康教育，年中行事）の一つに組み込まれていた。その後，戦後，最も早く発表された兵庫師範附属明石幼稚園のカリキュラムは，日本の伝統的な年間行事と社会機能とを調和させた単元を構成しており，こうした単元（ふろしき単元），すなわち指導する内容をある一つのまとまりにしたものを，ある期間集中して指導していくことが当時の特徴となった[2)]。行事はその点で，幼児期教育カリキュラムにおいて，重要な役割を担うこととなった[3)]。

「保育要領」は，昭和31年に「幼稚園教育要領」と名称が変更され，「行事」は，「保育内容」から外されたが，「指導計画の作成とその運営」の項の中で，幼稚園の教育効果を高めるために，季節や行事をじゅうぶん考慮し指導計画を立案する旨が記載されることとなった。その後，3回の改定が行われ，現在に至っているが，平成10年度の新幼稚園教育要領には，指導計画上の留意事項(特に留意する事項)として，「(4)行事の指導に当たっては，幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え，幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお，それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し，適切なものを精選し，幼児の負担にならないようにすること」と記述されている。

現在，幼児教育の現場では，日本の四季を活かし，また，保育園・幼稚園の理念や地域性を反映した多種多様な行事が行われるに至っている[4)]。しかし，行事自体の多様性から，その実態把握は十分になされてきておらず，幼児期教育カリキュラムに関して，行事に着目した考察が行われてきていないのが現状である[5)]。幼児期教育カリキュラムにおける行事の教育的価値に着目し，その役割を再認識することは，幼児教育の質の向上に貢献すると考える。

そこで，本研究では，現場の幼稚園教諭への質問

1 日本学術振興会特別研究員（京都大学）
2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設
3 横浜市立下和泉小学校

紙調査ならびにインタビューを通して，現在の幼稚園教育における行事の位置づけを明らかにし，行事のあり方に関する今後の課題を探ることを目的とする。なお，本調査は，平成13年11月～平成14年2月にかけて行われた。

（1）インタビュー調査

1．方法

対象者：広島県内幼稚園の保育経験年数の異なる３名の幼稚園教諭。３名は，私立Ａ幼稚園担任教諭のＡ氏（保育経験１年），国立Ｂ幼稚園担任教師のＢ氏（保育経験15年）公立Ｃ幼稚園園長のＣ氏（保育経験35年）であり，３名はすべて女性であった。対象者の選出にあたっては，広く意見を得るために，保育経験や設置主体また幼稚園の雰囲気が異なるよう配慮した。Ａ保育者・Ｂ保育者は，担任保育者として自分たちの実践を振り返る形でインタビューに答えてもらい，Ｃ保育者は，園長という立場から，他の担任保育者の様子を想起しつつ答えてもらった。なお以下の記述はこのイニシャルに対応する。

インタビューの形式：インタビューは，個別に行われた。インタビューは約２時間にわたって行われた（但し，インタビューは別の内容について尋ねるものも含んでいたため，行事に関する内容は実質，約１時間であった）。

インタビューの質問内容：質問項目は，(1)各幼稚園における行事の現状，(2)指導計画における行事の位置づけ，(3)行事を通して子どもは何を学んでいるか（教育的意義の把握），(4)行事において量・質ともに改善すべき点はあるか，であった。質問項目については，予め，インタビュー対象者に伝えており，筆者のうち２名によってインタビューが行われた。インタビューは，インタビュワーとのやりとりが重ねられる形で行われた。また，インタビュー内容はすべて録音し，その後，内容を文字化した。

2．結果・考察

以下，質問項目ごとに，３氏のインタビュー内容を概観する。なお，インタビューの要約を資料１に示している。

（1）行事運営の現状

ここでは，各園の特徴を記述しながら，述べることとする。

Ａ幼稚園は，保護者のニーズに積極的に応えていく姿勢を有している。そのニーズの主なものは，子どもに対する知育や運動に関する早期教育である。そして，それらは発表会・運動会を通して，目に見える成果として保護者に向け提示される。A保育者は，行事の運営を負担に感じていると発言しているが，それは，子どもの欲求と行事に関連する活動が見合っていないと感じていることに由来すると考えられる。B幼稚園は，保護者と綿密に連携をとっている。また，B幼稚園は複数年ごとに研究課題を掲げ，それに応じて，指導計画等の見直しを行っている。行事運営に関しても，従来，組み込まれてきた行事についてのねらいの捉え直しを行い，行事と日常の生活との連関，もしくは行事と行事の連関を意識しながら，幼児教育の一環として行事に積極的に取り組んでいる。C幼稚園は，地域密着型であり，子育て支援のサービスも充実している。地域の要請に応じて，交流会等が増え，行事の相対的数が多くなっている。また，毎年の行事が恒例となり，行事で行われた活動も日常の保育に還元されにくい現状が示された。

（2）指導計画における行事の位置づけ

3幼稚園とも行事は何らかの形で計画的に実施されている。しかし，それらの計画は，A幼稚園の場合は，発表会や運動会の当日に子どもの遊戯・歌・運動が最高潮になるために綿密に練られた計画であり，C幼稚園の場合は，日常の計画（指導計画）とは，切り離された形での計画（行事計画）となっている。一方，B幼稚園は，日常的な子どもたちの活動や発達状況を踏まえ，行事以降の活動をも含めた長期な見通しもった指導計画を立てている。

（3）行事を通して子どもは何を学んでいるか

行事の教育的意義は，体の発達を支え，文字・数知識を使う場として，科学的知識の育成の場として機能し，異年齢の交流や楽しさを共有する経験を含むなど，新幼稚園教育要領に記されている５領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）にわたるものであり，展開によっては，広がりをもった活動になる可能性があることを示すものであった。また，日本の四季の移ろいを感じる上でも行事が導入されており，そこでは，「生きる上での知恵」を知る機会にもなり得ることが示された。

（4）行事において量・質ともに改善すべき点はあるか

行事が単発的に行われやすいという反省からC保育者は，行事を子どもにとって受身的なものにならないようにする配慮を行うとともに，日常の保育と連関した形で実施されるべきであると述べた。また，行事が終わってからの評価を行うことが重要であり，評価を行うことで次の行事がより充実したものになるという考えを示した。B保育者は，行事の都度，その教育的意義を見直し，その内容について

他の保育者と共通理解をしていくことが大切であるとしている。このように，行事における改善点が示されたものの，A保育者は，経験年数も浅く，比較的園全体の活動となりやすい行事に対して，意見を言うこと自体難しいという現状を述べていた。各保育者が，教育者として他の保育者，園長と対等に意見を述べ合う環境作りが幼児教育現場で進められていく必要性を示すものであった。

このように，行事は教育的意義を含む活動であり，多くの行事が幼児教育の現場に導入されている現状が示された。3氏とも話し合いの機会は何らかの形で有し，各園で設定された行事のねらいに応じて指導計画（もしくは行事計画）を立てていた。しかし，話し合いに関して言えば，A幼稚園，C幼稚園ともに，それは，行事運営についての伝達の場として機能しており，A保育者，C保育者は，行事のねらい等について違和感を覚えていた。この状況は，幼稚園の設置主体ならびに地域性を反映していることも考えられるが，B幼稚園と異なり，必ずしも，保育者全員が各行事について教育的意義を認め，子どもの遊び等の状況や発達状況に応じた行事の運営のあり方について他の保育者と話し合う機会を有していないことを意味していると考えられる。また，行事と日常の保育とのつながりについていえば，行事そのものが日常の活動として行われるものであり，それらのつながりを語るのは難しい。しかし，発表会後に楽器等の道具がすべて片付けられてしまっては，子ども達が発表会で使ったものとは異なる楽器に興味を示し，それらを楽しむという可能性が奪われてしまう。そのような観点から行事と日常の生活とのつながりを考慮していく必要があろう。

（2）質問紙調査

質問紙調査では，設置主体によって，重要視される行事が異なるか否かを調べるために，(1)重要視している行事は何かといった点を尋ねた。その他，幼稚園教育における行事の運営に関する現状を把握するために，(2)行事と日常の保育とつながり，(3)行事の選択についての話し合い，(4)行事におけるねらいの明確さ，(5)行事の評価の実施について尋ねた。また，今後の行事の運営のあり方として，(6)今後のあるべき行事の数についても尋ねた。

1．方法

調査方法：郵送による質問紙配布を行い，質問紙記入後，郵便による返送を求めた。

調査対象者：全国の国立大学附属幼稚園ならびに，広島県内の公立・私立幼稚園を調査対象園とし，各園につき3名のクラス担任を調査対象とした。回答数は，214人（回収率は約36%）であった。回答者内訳は，国立大学の附属幼稚園教諭109名，公立幼稚園教諭59名，私立幼稚園教諭46名であった。個人名は無記名とした。

調査項目：質問紙は，教育課程，指導計画，行事ならびに保育観に関する質問内容から構成された。本研究においては，行事に関する質問項目のみを取り上げる。

質問項目(1)：幼児教育の現場では，様々な種類の行事が行われているため，いかなる行事を重要視しているかという点について，7つのタイプの行事から選択するよう求めた。質問は，「貴園で以下のタイプの行事のうち保育にとって最も重要だと思われる順（1～7）に番号を記入してください」であった。行事のタイプは，式（入園式・卒園式），季節の行事（子どもの日・七夕・クリスマス会・もちつき），運動（運動会・持久走），交流（入園前児・小学生・老人），発表（発表会・学芸会・合唱会），園独自の行事（○○祭り・お泊まり保育・カレーパーティー），定期的行事（避難訓練・身体測定）であった。質問項目(2)：「行事は日常の保育とつながりがありますか？」と尋ね，とてもある，少しある，まったくない，のいずれかから選択するよう求めた。質問項目(3)：「行事の選択について話し合いを持ちますか？」と尋ね，いつも持つ，ときどき持つ，まったく持たない，のいずれかから選択するよう求めた。質問項目(4)：「行事においてねらいを明確に定めていますか？」と尋ね，明確に定めている，あまり明確ではない，どちらでもない，のいずれかから選択するよう求めた。質問項目(5)：「行事終了後，行事について評価を行いますか？」と尋ね，いつも評価する，ときどき評価する，まったく評価しない，のいずれかから選択するよう求めた。質問項目(6)：「行事の数を今後どうすべきだと思われますか？」と尋ね，今のまま，増やしていく，減らしていく，のいずれかから選択するよう求めた。

2．結果・考察

(1)重要視している行事

各設置主体において重要視される行事を明らかにするために，各行事の平均ランク（表1参照）をもとにフリードマンの検定を行ったところ，国立幼稚園（χ^2=89.6，$p < 0.001$），公立幼稚園（χ^2=24.2，$p < 0.001$），私立幼稚園（χ^2=39.3，$p < 0.001$）において，有意差がみられた。そこで，下位検定として符号付順位検定を行った。その結果，国立幼稚園と私立幼稚園の結果が類似していた。国立幼稚園

は，式・運動・季節の行事・園独自の行事が，定期的な行事よりも重要視され，定期的な行事は，交流よりも重要視されていた。また，私立幼稚園は，季節の行事・発表・園独自の行事・運動が，定期的な行事よりも重要視され，定期的な行事は，交流よりも重要視されていた。一方，公立幼稚園は，式が，交流・発表・園独自の行事・定期的な行事よりも重要視されており，交流・発表・園独自の行事・定期的な行事に有意な差はみられなかった。特に，交流に関しては，国立・私立幼稚園ともに平均ランクが最も低かったのに対して，公立幼稚園ではその順位は中程度であった。このことは，公立幼稚園が，地域に根ざした交流を核とした行事を他の設置主体に比べて重要視していることが推測され，設置主体の特色を反映していると示唆される。

以下，設置主体による違いは見られなかったので，一括して報告することとする。

(2) 行事と日常の保育とつながりの程度

行事は日常の保育ととてもつながりがあると答えた保育者は80%，少しあると答えた保育者は20%，まったくないと答えた保育者はいなかった。

(3) 行事の選択について話し合いの頻度

行事の選択について，話し合いをいつも持つと答えた保育者は84%，ときどき持つと答えた保育者は15%，まったく行わないと答えた保育者は1%であった。

(4) 行事におけるねらいを明確さ

行事において狙いを明確に定めていると答えた保育者は85%，あまり明確ではないと答えた保育者は7%，どちらでもないと答えた保育者は8%であった。

(5) 行事の評価

行事終了後，行事についていつも評価すると答えた保育者は81%，ときどき評価すると答えた保育者は19%，まったく評価しないと答えた保育者はいなかった。

(6) 行事の数について今後のあり方

行事の数を今後どうすべきであるかという問いに，今のままでよいと答えた保育者は59%，減らしていくと答えた保育者は，40%，増やしていくと答えた保育者は，1%に過ぎなかった。

質問紙調査の結果，設置主体により，重要視されている行事が異なることが明らかとなった。行事の数については，現状を維持したいとする保育者が6割であるのに対して，減らしていきたいと考えている保育者が4割おり，この点に関して，現場で葛藤が生じていることが示された。

また，(2)行事と日常の保育とつながりの程度，(3)行事の選択について話し合いの頻度，(4)行事におけるねらいの明確さ，(5)行事の評価について，いずれの設問も，80%以上の保育者が，3段階のうちに最も高い評定を行っていた[6]。

総合考察

質問紙調査ならびにインタビューを通して，行事は教育的意義を含む活動であり，多くの行事が様々な形で，幼稚園教育の現場に導入されている現状が示された。しかし，その中で，A保育者は，園の方針により，運動会や発表会という「ハレ」の日をよりよく迎えるために行事が計画されていることを憂いており，C保育者は，新たな行事が次々と加算されてきている現状を打開する時期を迎えていることを自覚し，子ども達が行事に主体的に取り組んでいけるようにすべきであるという問題提議を行っていた。C保育者の発言には，そういった主体的態度を保育者も持つべきことが意味されていると考えられる。一人一人の保育者が，行事における教育的意義を考慮しながら，質ならびに量ともに適切な行事運

表1．各設置主体における各行事の重要度

	私立幼稚園		国立幼稚園		公立幼稚園	
順位	行事内容	平均ランク	行事内容	平均ランク	行事内容	平均ランク
1	季節	3.10	式	3.03	式	3.00
2	発表	3.51	運動	3.27	運動	3.65
3	園独自	3.51	季節	3.31	季節	3.80
4	運動	3.63	園独自	4.19	交流	4.14
5	式	4.03	発表	4.22	発表	4.34
6	定期	4.47	定期	4.48	園独自	4.41
7	交流	5.74	交流	5.50	定期	4.66

営を心がけることが，幼児教育の質の向上に繋がると考える。

平成14年度改正の幼稚園設置基準では，「自己評価」の項目が新たに加わった。そして，自己評価の本質は，「している・していない」（形式的評価）の次元から捉えるのではなく，保育者自身が，子ども達の育ちに応じて，「どのようなねらいを持ち，いかなる実践を行い，それをいかに評価するか」といったことを自問し続けることにあろう。

話を行事に戻せば，そういった視点こそ，行事に向けられるべきなのである。行事の数についても現場で葛藤が生じている（質問紙調査質問６）が，このような現状を考慮しつつ，各園の特色を打ち出し，適切に行事を行っていく上でも，行事についてのねらい・評価ならびにそれを支える保育者の相互交流の場について，再考する必要がある。

行事についてのねらい・評価のあり方

多くの場合，行事は園全体の活動となる。そして，行事を迎えるまでの準備ならびに，行事自体の段取りについて多くの時間が割かれる。しかし，湯本[6]は，受身的に行事をこなしてきた自分自身の実践を振り返り，伝統的に受け継がれてきた行事を見直す際に「（子どもが）何を経験し，その過程で何が培われていくのか，どのような人になって欲しいかをまず，保育者が保育者どうし考えあわなければならない」という考えを示した。現在の子どもの育ちと照らし合わせてこそ，子ども達にとっての有意義な行事のありかた（ねらい）が見えてくるのである。では，いかに幼児教育の現場で各行事のねらいを具体化させ，それを評価すればよいのかであろうか。

インタビューにおいてＣ保育者は，実践後の評価の重要性を指摘していたが，評価に関しては別の視点も取り得る。それは，実践と評価が表裏一体という考え方である。その具体例として，イタリアレッジョ・エミリア市の実践[7]が参考になる。そこでの実践では，子どもの発話をひろい，子どもの理論を大人が学び，そこから子ども達の可能性を見出す。そして，子どもの発話・創作物等を記録し，それをドキュメンテーションにまとめるという活動を行う。評価に関して言えば，活動が終結した時点で活動を評価するというのではなく，その経過の総体が評価そのものであり，ねらいも，子ども達の活動や活動の段階に応じて，柔軟に変容する。保育者自身が子ども達の声に耳を傾け，実践を軸に，ねらいと評価を螺旋状に形作るのである。そこでのアプローチは，比較的長期に行われる日本の行事と多くの点で共通しており，ねらい・評価の捉えかたにとって，行事運営に重要な示唆を与えるものであると考える。

保育者の相互交流の場

行事は幼児期教育カリキュラムの一部をなすものである。そして，子どもの育ちと保育者のねらい次第で，行事は自在に変容される。しかし，園全体の活動となりやすい行事にとって，そのような効力感をもてない保育者がいるのは確かである。質問紙調査においては，行事の選択についての話し合いの機会を良くもっていると答える保育者が８割にものぼっている。しかし，インタビュー調査においては，そこでの話し合いが，年間行事の選択の決定や，行事の内容・ねらい等の伝達の場になっている場合も少なくないことを示していた。つまり，話し合いを持つことが，必然的に行事を中心とした保育者間の相互交流の場を提供するとは限らないのである。行事を，幼児期教育カリキュラムの一部をなすものとしてみなし，園全体と巻き込む一つのプロジェクトとして捉えるならば，日々の実践を共有し，見直す機会を提供する場として保育者の話し合いを行う必要がある。もちろん，その話し合いは活動を通して繰り返される必要がある。保育者一人一人が教育者として対等な立場に立ち，今後の幼児教育の向上を目指す体制を，話し合い（園内研修）に求めることには，意義がある。そういった園内研修の場としての話し合いの機会は，幼児期教育カリキュラムにおける行事の意味づけをより確かなものにすると考える。

最後に，本研究では，保育者を対象としており，子どもについて直接的に焦点をあてたものではない。今後，子どもにとって行事がどのような意味を持つのかといった点を明らかにしていくことが課題である。

注・引用文献

1）学習指導要領データーベース作成委員会（国立教育政策研究所内）の作成による学習指導要領データーベース（http://nierdb.nier.go.jp/db/cofs/）を参考にした。

2）高杉自子　保育における計画の変遷　高杉自子・塩美佐枝（編）『演習保育講座5　教育課程・保育計画論』　光生館　1999

3）明治9年，わが国最初の幼稚園として東京女子師範学校附属幼稚園が創設された当時のカリキュラムでは，課業活動が中心であり，保育時間表では，フレーベルの二十恩物を中心に，唱和・説話・体操・遊戯が，科目のように扱われ，曜日ごとに設定された時間に配列されていた。

明治期後期から大正期にかけて，それまでの恩物中心のカリキュラムを批判し，倉橋惣三（1882-1955）は，「誘導保育」を主軸とする「系統的保育案」を完成させた。そこでは，1つの主題をもとに継続して取り組む統合化された遊び・作業活動を中心に行うと意図されたものであった。ただし，当時の保育案（東京女子高等師範学校附属幼稚園編「系統保育案の実際」岡田正章監修『大正・昭和保育文献集』第6巻所収，昭和53年）には，行事に関する記述は見られない（年間行事表（p. 35）の記載のみ）。その後，倉橋の提案は，コア・カリキュラム運動にひきつがれ，コア・カリキュラムの影響を受けた幼児教育カリキュラムにおいて，行事は，「中心となる活動」の一部として位置づけられることとなった。行政側（文部省）から「保育要領」が提示されると同時に，当時のカリキュラム運動の影響を受け，行事は，幼児教育カリキュラムにおいて，重要な位置づけを築くに至ったと推測する。

4）小林由憲　「保育行事についての調査研究—北陸3県を中心として—」『日本保育学会第40回論文集』pp. 108-109　1987

5）行事について記述した論文は非常に少ない。しかし，行事の一つである運動会が，いかにして幼児教育の現場に導入され，そこでの運動することの意味について詳細に検討したものに無藤（1996）がある。参照されたい。
無藤隆「幼稚園の運動会における運動することの意味」『乳幼児教育学研究』5　pp. 25-31　1996

6）湯本嘉奈子　「行事について思うこと」『季刊保育問題研究』189　pp. 30-41　2001

7）レッジョエミリアの保育実践については，以下に詳しい。
石垣恵美子・玉置哲淳監訳　『レッジョ・エミリア保育実践入門—保育者はいま，何を求められているか—』北大路書房　2000
レッジョ・チルドレン　『イタリアレッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録　子ども達の100の言葉』学習研究社 2001

参考文献

岡本富郎「戦後のカリキュラムの変遷—行事との関連で—」『保育研究』3　pp. 342-347　1983
宍戸健夫　「保育学の過去・現在・未来—保育カリキュラムを中心に—」『保育学研究』　39　pp. 84-92　2001
若き認知心理学者の会『認知心理学者　教育評価を語る』北大路書房 1996

付記

本研究は，広島大学教育学部リサーチオフィス経費（平成13年度）の補助を受けた。研究の推進のために広島大学教育学部リサーチアシスタント（平成13年度）を雇用し，研究・調査を実施した。お忙しい中，調査に協力していただきました保育者の皆様，資料の提供を頂いた広島大学大学院鳥光美緒子教授に感謝申し上げます。

また，本研究の一部は，日本保育学会第55回大会において自主シンポジウム「これからの保育カリキュラムはどのように進むべきか」で発表された。その際に，指定討論者の文部科学省初等中等教育局視学官小田豊先生（現　国立教育研究政策所）には有益なコメントを頂きました。ここに深謝いたします。

資料1．幼児期教育カリキュラムにおける行事運営の現状と今後の課題に関するインタビューの概要

A保育者	B保育者	C保育者
（1）行事の現状		
本園の大きな行事は運動会と発表会です。これらは本園で何をしているかについての保護者へのアピール場となっています。行事が負担になっているという現状もあります。運動会や発表会の前になると毎日練習というのが普通なので大変です。1か月前から練習を毎日するようになり，1週間前にはリハーサルをします。毎日練習を行うので，子どもも飽きてきて，「もういや」って暴れる子も出てきます。 行事は園長先生と主任の先生によって決められ，担任保育者は，行事の予定を立てる際の話し合いには参加しません。ただし，後日，行事の運営に関する説明が行われます。	季節の行事が本園の特徴です。畑で野菜を作るという季節の行事から，そこで穫れた作物でお芋パーティーやカレーパーティーを行い，みんなで食べるといったところまで，行事が有機的に繋がっています。また，行事に関して，養育者に向けた発表という側面はありません。発表会等はありませんし，運動会も各幼児の課題を考慮しつつ，普段の遊びを発展させ種目を設定します。 また，研究テーマに応じて，行事の意味を考え直します。具体的には本園における研究テーマが，「人間関係の深まりを探る」というものだったため，従来から行っている勤労感謝という行事について，私たちの生活は，身近で働いてくれる人々と密接に繋がっていることを認識することをねらいとするなど，行事のねらいを捉え直しました。 行事は，副園長ならびに全担任保育者によって年度始めならびに行事前にも行事のねらいを含めた話し合いの機会を持ちます。	作品展や季節に応じて七夕をやったりとか，餅つきをやったりとか，季節的な行事もあったり，それから，母の日，父の日，七夕，虫歯予防デー。園独自の行事として，地域との交流を意識した入所前児との交流や盆踊りなど多様な種類の行事があるというのが特徴でしょう。こちらに赴任して間もないので，経緯はよく分かりませんが，あれをした方がいい，これをした方がいいと，どんどんと行事が増えてきているようです。 また，発表会などが終わってしまえば，その活動がプツリと途絶えてしまうといった点は気になっているところです。発表会の段取りにプラスして片付けの日まで，決まっているのですから。 行事の運営は，昨年行われた行事が，本年度のカレンダーに照らし合わされ，日付だけが変わり，昨年通り行われるというのが現状です。年度の最初に年間計画が立てられ，主任よりその計画が伝えられます。
（2）指導計画における行事の位置づけ		
運動会や発表会においてきちんとしたものができるように，それらに向けての全体的な計画を立てます。また，クリスマス会の場合は，準備段階で制作があり，遠足については，遠足に関する歌の練習をします。そのような制作や歌唱ついては，日案の計画に入れています。	指導計画の中で行事は大きなウェイトを占めています。まず，年間計画を3，4月の時点で立てます。そして，月案や日案に反映させます。指導計画には，行事までの前段階までを含む場合もありますし，運動会であれば，年長児が行っていた種目を年少児が遊びに反映することもありますので，場合によっては行事後までが，指導計画に組み込まれます。	大きな行事に関しては，（日常の指導計画とは別に，）行事計画案というのを作ります。指導計画はそもそも，簡単な週案しかありませんので，週案の中に行事予定を書き込むと言ったことになっているようです。
（3）行事を通して子どもは何を学んでいるか		
運動会や発表会など，大勢の人の前に立ち表現できる活動は，自信につながってい	運動会であれば，異年齢の交流や運動することの楽しさを学んでいるでしょう。ま	季節の行事など，生きていく上の知恵となっている部分を学んでいると思います。

ると思います。また，体力や忍耐もついているようです。体力がついたことにより，その後の遊びが大きくなっているようです。また，避難訓練は，災害に際し，どのように対処すればいいのかを知ることができます。七夕や節分などは，季節ごとの伝統文化を知ることができると思います。	た，知的活動として，朝顔やお芋を育てる際には，生命の一巡に気付くということができると思います。植物を育てていく上で必要なものとして，太陽の恵み，光，雨などの気づきは，年長児の行事に加えていく視点かもしれません。しかし，行事は，知的活動を促進しているというよりも，友達と楽しさを共有できるという側面の方が強いと思います。	バザーをするだとか，年賀状を書く事を通して，数や文字に慣れ親しむことはできていると思います。数や文字を教えることはしませんが，子ども達が素朴的な概念として持っている数の知識を使う場になっていると思います。子ども達が，文字に興味をもったり，文字を書くことを通して，メッセージが伝わるといった事など知的に受け取っている部分があると思います。
（4）行事において量・質ともに改善すべき点はあるか		
行事自体を増やしたり減らしたりすることが，一人の担任保育者によってできるのか分かりません。ただ，行事を負担に思うことはあります	行事の都度，各年齢段階の子ども達にどんなことを体験して欲しいのかを明確にしておくことは大事だと思います。また，それらについて，他の保育者と共通理解していくことが必要だと思います。	保育者から子ども達へという一方的なものではなく，子ども達も楽しみながら，子ども達が主導的になるという方向で行事を行っていく必要があると思います。また，行事と日常の保育が連関するような行事の持ち方を検討していく必要があると思います。そして，重要なのは，行事が終わった後に，その活動に関するプラス面ばかりの評価ではなく，あらゆる角度から評価を行うことが重要だと思います。来年度の活動に繋がるような反省の仕方を先生たちで考えていかないといけないと思います。